

聖書：使徒2：14～36

説教題：主ともキリストともされた方

日時：2013年6月2日

ペンテコステの日のペテロの説教です。これは色々な意味で注目すべき説教です。まずこれは使徒の働きに記されている最初の説教です。かなりのスペースを割いて記されています。このことからだけでも、これが重要なものであることが分かります。またこれはペンテコステの出来事を説明する説教です。この日には様々な不思議な現象が現れました。そこにはどんなメッセージが込められているのか、このペテロの説教が明らかにしてくれます。またこれはこの日に下った聖霊に導かれた説教です。これまでおっちょこちょいの代表だったペテロが生まれ変わったように立派な説教をしています。そしてこの説教によって、次回見るように3000人が回心します。まさに聖霊の祝福が注がれ始めた使徒の働き最初のメッセージにふさわしい説教です。今日は聴衆の反応を引き起こす前の36節までの部分を見て行きます。

まずペテロが語っている一つ目のメッセージは、この日の聖霊の注ぎは旧約の預言の成就であるということです。彼はここにいる人たちは酔っているのではない、と言います。13節に記されているように、ある人々は、弟子たちが様々な国ことばで神のみわざを語るのを聞いた時、その中に自分たちが知っている言葉を聞き取れなかったからでしょう、「彼らは甘いぶどう酒に酔っているのだ。」とあざけりました。しかしペテロは、今は朝の9時だから、こんな時間から酔う人たちがいるはずはないと言います。そしてこれは預言者ヨエルによって語られたことの成就であると説明します。ペテロが引用したヨエルの言葉から、三つの点に注目したいと思います。

まず一つ目は17節の「終わりの日に」という言葉です。もともとのヨエル書2章では「その後」と記されていますが、ペテロは聖霊に導かれて「終わりの日に」とより明瞭に語りました。「終わりの日」とは、直訳すれば「終わりの日々」であり、一定の期間を指しています。これはイエス・キリストがこの世に来られた時から、再び来られる再臨の日までの期間を指します。その終わりの日に神は聖霊を豊かに注ぐ祝福を来たらせる、と約束しておられた。私たちはここに、すでに終わりの日は始まっているのだと知らされます。この終わりの日は、この歴史のクライマックス・最終段階の時期を意味しています。約束のメシヤが遣わされて地上でみわざを成し遂げ、ついに天から聖霊が注がれました。もう次のプログラムは、イエス様の再臨のみです。いつそれが起こってもおかしくない重大な時期に私たちは生きています。その緊張感を改めてこの言葉から覚えたいと思います。

ヨエルの預言から注目したい二つ目のことは、この日に聖霊がすべての人に注がれると言われていたことです。4節で見ましたように、この日、聖霊はそこにいた信者全員に下りました。旧約時代にも聖霊の働きはありましたが、それはある特定の働き人に、ある特定の期間働くというものでした。しかし神はすべての人に聖霊が下る日のことを約束して来られました。その預言が成就しました。

もう一つ目を留めたいのは、19～20節の言葉です。ここは難解な部分です。これはいつの日のことを語っているのでしょうか。ある人は20節の「太陽はやみとなり」とか「血」という言葉から、これはイエス様の十字架の日の出来事を指すと見ます。またある人はペンテコステの日当日のことを指すと見ます。19節の「上は天に不思議なわざを示し、下は地にしるし

を示す」とはまさにこの日の不思議な現象を指している、と。またある人はこれは主の再臨が起こる直前の天変地異を指していると言います。これのどれであるか、というのは難しい問題です。ある人はこれについて次のように言っています。ペテロはここで 19～20 節については強調していない。彼はこの日に起こったことを説明するために、ヨエルの預言を引用し、そのヨエルの幻に 19～20 節の内容も含まれていたのと一緒に引用したが、それら一つ一つが何を指しているかについては特定していない。確かにいつに到来した聖霊の時代において、19～20 節に言われていることも起こるだろう。ペテロ自身はこれらについて彼なりの考えを持っていたかもしれないが、詳細は神に委ねている。ただ彼が強調しているのは、ヨエルが預言した聖霊の時代が確かに到来したということ。そして様々な不思議やしるしが行なわれる中で、主の名を呼ぶ者はみな救われる、ということである、と。

さて、ペンテコステの出来事をまず旧約の預言との関連で語ったペテロは、次により中心的なメッセージとして、この出来事はイエス・キリストとの関わりの中で理解されるべきものであることを 22 節から示して行きます。聖霊のみわざは単独で考えられるべきではなく、イエス・キリストのみわざとの関係の中で考えられなければなりません。そのことをペテロは示しています。

まず彼が目玉させているのは、イエス様の地上の生涯です。22 節：「神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議としるしを行なわれました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方あかしをされたのです。これは、あなたがた自身のご承知のことです。」 イエス様の地上の生涯には、たくさんの不思議やしるしが伴っていました。神はそのことによって、この方こそ神が遣わしたもう救い主なるお方であると示して来られました。ところがその方をあなたがたは不法な者の手によって十字架につけて殺した、とペテロは言います。ペテロはこのことを述べる際、「神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を」と言いました。一見このような言葉はここに付けなくても良いように思います。こんな言葉を付け加えると話がややこしくなりますし、何よりも相手に言い訳の余地を与えることにつながりそうです。オレたちが悪かったかもしれないが、それは神の計画に基づくことだったのだから、そんなにオレたちは悪いことにならないのではないかと。しかしペテロはもちろん弁解の材料を与えるためにこのことを述べたのではありません。これはここに示されている神の姿を正しく仰ぎ、このことによって神を礼拝するためです。この 23 節で言われていることは、一言で言って神秘です。私たち人間の頭にうまく収まるようには説明し切れないことです。しかし少なくとも言えることは、イエス様を十字架につけた人たちは神に強制されてそれを行なったのではないということです。彼らは自分の意志に反して無理やり何かをさせられたのではない。彼らは自分の意志でイエス様を死に追い込んだ。彼らは自由にそのことをした。ところが何とそれは神にとってハブニングではなく、むしろ神の計画と神の予知とに基づくことだったというのです！私たちはここに神の驚くべき大きさを思わされます。神は私たちとは全く次元の異なるお方なのです。私たちの小さな頭で云々できるような方ではない。私たちには想像もつきませんが、何と彼らが自由に行なったこのことさえも、神の永遠の昔からの計画と一致していたというのです。そしてここには神の偉大さと同時に神の愛が示されています。神はこのような仕方、私たちを救う道を備えてくださったのです。これ以外では救いがない私たちのために、神がこのことをご計画し、導いてくださったのです。神がこのような方であられるからこそ、私たちに望みがあり、救いがあるのです。

さて、こうしてイエス様の地上の生涯を導かれた神は、続いて何を行なわれたのでしょうか。二つ目のことはこの方の復活です。24節：「しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」神はこのイエスを死よりよみがえらせました。それは旧約聖書にすでに預言されていたことであると述べて、ペテロはダビデの言葉を25節から引用します。詩篇16篇8～11節の言葉です。そして彼はこれはダビデが自分について語った言葉ではないと言います。なぜならダビデは死んだ後に葬られて、その墓はいまだに私たちのところにあるからだ、と言います。ではダビデは誰のことを語ったのか。それは後に来るキリストのことだ、とペテロは言います。31節：「それで後のことを預言して、キリストの復活について、『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない』と語ったのです。」そして確かに神はイエスをよみがえらせたことを私たちはこの目で見た、我々はその証人である、とペテロは32節で付け加えます。このように神はイエス様を死からよみがえらせることによって、この方こそ自分が立てたキリストであることをはっきり示されました。

それだけではありません。三つ目にペテロは、イエス様の昇天の事実に注目させます。イエス様は復活してどこに行かれたかと言えば、神の右に上げられた。そしてそこから今、聖霊を注ぐ御業をなされたのだ、と説明します。すなわちこのペンテコステの聖霊の注ぎは、イエス様がこの世界一切をすべ治める最も高き座についたことの証明なのです。この聖霊の注ぎをもって、イエス様は全世界を治めるみわざを開始されたのです。ペテロはここでも旧約のダビデの言葉を引用します。34～35節：「主は私の主に言われた。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまではわたしの右の座に着いていなさい。」これもダビデには当てはまりません。ダビデは天に昇っていないからです。では誰のことでしょうか。これはダビデが私の主と呼んだ将来のキリストのことです。まさにイエス様こそが、その「主」であることがこの昇天において、また聖霊の注ぎにおいてはっきり示されている、とペテロは言っているのです。

こう述べたペテロの結論が36節です。「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」このペテロのメッセージの鋭さを私たちは理解できるでしょうか。この説明を聞いた多くのユダヤ人は、十字架上で死んだイエス様をこのような光の下では見ていませんでした。彼らのある者たちは積極的にイエス様を十字架につける！と主張したかもしれませんが。ある人は付和雷同的に賛成したかもしれませんが。ある人はただその出来事を傍観し、正しくないことが起こったと思いつつも、見捨てる態度を取っていたかもしれません。しかしペテロが示したことは、そのイエスは神が「主」また「キリスト」として立てたお方であるということです。だから神はイエスを復活させ、天に昇らせ、この聖霊降臨の御業を導かれた。そういう「主」であり「キリスト」であるお方をあなたがたは十字架につけたのだ！とペテロは述べたのです。彼らは神の御心と全く反対の、大変な道を進んでいたのです。神が立てた尊い方を退けたばかりか、殺すという恐るべきことまでしてしまった。このままでは自分たちが赦されるはずもなければ、救われるはずもない。そこでこのペテロの説教を聞いた人々は心を刺され、37節で「兄弟たち。私たちはどうしたらよいのでしょうか。」と切実な思いで導きを求めたのです。そしてペテロは彼らになすべき応答について勧めて行くのです。

今日の私たちはこのペテロの説教をどう聞くべきでしょうか。私たちはイエス様を十字架につけた覚えはないかもしれませんが。「あなたがたが十字架につけたのです」という言葉は、私に当てはまらないと思うかもしれません。しかしイエス様が十字架につけられたのは私たちの罪のためです。イエス様を十字架に追いやったのは私たちと言えるのです。そのイエス様について神は、特に復活と昇天とペンテコステの出来事を通して、この方こそ「主」であり「キリスト」であることをはっきりあかししています。私たちはこのメッセージに、どういう態度を取る者でしょうか。神が立てた「主」また「キリスト」を無視して、果たして最後の日に大丈夫でしょうか。何事もなく終わることがあるでしょうか。そして私たちは、23節で見た神の測り知れない愛を見過ごしてはなりません。神は私たちをご自身の一人子の犠牲を通して救うという道を計画してくださいました。そして愛する御子を遣わし、その方が人々からひどい仕打ちを受け、十字架上で殺されるという扱いを受けることをよしとしてくださいました。こうしてまで私たちを罪から贖うイエス様を「主」また「キリスト」として立てておられるのに、その方を無視し続けたら、もう救いはありません。私たちは、恐れをもって神を仰ぎ、「私はどうしたらよいのでしょうか。」と同じように問うべきではないでしょうか。そして続いてペテロが語ってくれる導きに従うべきではないでしょうか。

神はペンテコステの出来事の内にはっきりと一つのメッセージを語っています。それはあのイエスこそ、私たちの主でありキリストであるということです。私たちはこのメッセージの前で、自分はどのような道を取るべきかを良く考え、もう一度ペテロの説教に聞き、神が「主」また「キリスト」において差し出している救いを自分のものとして受け取る祝福の道を選び取って歩みたく思います。